

えぽく

第2巻3号通刊12号
2001年3月12日発行
中央区八重洲2-1
八重洲地下街
TEL033272-2888

八重洲古書館
RETRO REVALUE RECYCLE

21世紀のほんや²

1983年12月に誕生しました『金井書店八重洲店』が3月4日に閉店いたしました。25㎡の小さな古本屋が50㎡に成長し、その閉には『八重洲古書館』も生まれました。17年間でずいぶん成長したものだな～と、感心しております。この成長は多くの皆様に支えられ、ご利用いただいた賜として本当に感謝申し上げる次第です。

21世紀になり、書物の世界も様変わりしていくことでしょう。「本はなくなる」とまで言われる今日この頃ですが、紙に印刷されて、きれいな製本で語りかけてくる“書物”はきっと生き残ることでしょう。デジタル化が進めば進むほどアナログが愉しくなることと私たちは考えています。その一つに、書物の世界があると思うのです。

私たちは、古本環流させて、再評価お客様のお声を聞く多くの方々にお勤しております。これを増やすことが大



屋という、書物を価をして(色々なきながら)、よりめする仕事をしてらは、古書ファンきな仕事と考えて

おり、その為に、『21世紀型古書店』を創造し、交通の便が良く、たくさんの方が訪れる八重洲地下街に『R.S. Books』として誕生させることにいたしました。商品量は少ないのですが、書物の内容をご紹介しますながら、新たな出逢いがあることを願って陳列いたします。

バリアフリーも念頭に、車椅子でも、バギーを引いてもゆっくり見られる店内にいたしました。目線を低くして陳列に工夫しており、比較的珍しい書物が床に近い方に展示される予定です。

今回の改装で明らかに違うタイプの店舗になります。古書マニアの、沢山の本がある方が嬉しい方は、八重洲古書館をご案内いたします。どちらが嬉しいか、両方も嬉しいか、皆様がお答えをくださることと思いますが、一人でも多くの方々に、お立ち寄りいただけるよう、スタッフ一同頑張ってお参りますので、ご支援ご愛顧賜りますようお願い申し上げます。

八重洲古書館店長 渡辺明子
金井書店八重洲店店長 川上亜衣子

スタッフのメッセージ

こんにちは。
先日、ニュースを見ていたら、「今日は啓蟄です」という言葉にぶつかりました。仕事に追われて、気が付くと季節が移っている、ということがここ数年で増えていたので、そのニュースはなんだかとても新鮮でした。

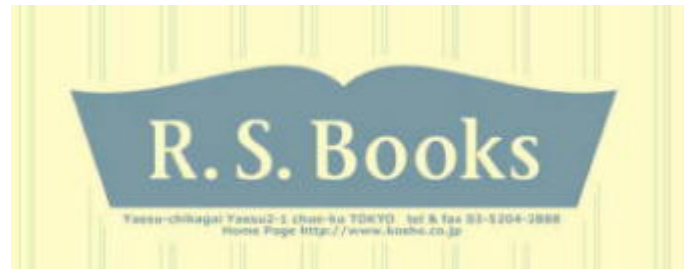
日本には、本来四季ではなく、24の季節があります。現在では、ほとんど口にされなくなりましたが、こうして何かの折に触れると、とても嬉しく感じます。少しずつ移り行く季節を敏感に感じて、24もの表現をした昔の人々は、とても豊かな感受性を持っていたのだということ、改めて実感します。

眠っていた虫達が活動を始める啓蟄ですが、虫達に負けないように、私たちの店舗も、新しい試みを開始します。長く御愛顧を頂いた金井書店八重洲店は、閉店してしまいましたが、新しいコンセプトによる新店舗が、4月2日にはオープンします。1年間という短い期間ではありますが、店長という責任ある立場で八重洲店で働いてきたもので、様々な感慨があります。新しい店舗への期待や喜びとは裏腹に、なんとなく寂しいような気持ちがあるのも事実です。冬を終えて新しい世界に活動を始める虫達が、期待と恐れを感じて起きだしてくるのも、こんな気持ちなのかもしれない、思ったりもします。

金井書店八重洲店は、しばらくの間、冬眠しますが、さなぎが蝶になる頃には、新しい店『R.S. Books』が、皆様の前にお目見えします。そのときには、また皆様に喜びを持って迎えていただけたら、とても嬉しく思います。それまで、レモンロードとはしばしの別れになりますが、一刻も早い皆様との再会の日を心待ちにしています。

金井書店八重洲店店長 川上亜衣子

最新情報はインターネットホームページをご覧ください。
<http://www.kosho.co.jp/>



TEL & FAX 03-3272-2888
営業時間 10:00~20:00

〒1040028 東京都中央区八重洲2-1 八重洲地下街
年中無休(元旦のみお休みさせていただきます)

ご意見ご感想ご提案をお待ち申し上げます。
下記宛にお寄せ下さい。

金井書店営業本部
〒161-0032 東京都新宿区中落合42116
FAX 03-3953-7851
E-mail: office@kosho.co.jp

趣味の文化展

近代以降の西洋絵画

前回の、『印象派』の特集は、いかがだったでしょうか。そのときにも触れましたが、現在ブリジストン美術館では、『レノアール展』が開催されています。すでに、1ヶ月が過ぎますが、今なお多くの人たちが、足を運んでいる様で、日本における印象派の人氣が、いかに広く根強いものであるかを、改めて感じさせられます。

今回は、前回に予告したとおり、印象派前後の美術の流れに注目し、近代から現代へと続く絵画の流れ全体を見てゆきたいと思います。

<新古典主義とロマン派>

フランス美術界において、印象派が台頭してくるまで、長くアカデミズムの主流をなしたのが、この二派でした。『新古典主義』の代表的な画家は、『ジャン・グロ』と、『ドミニック・アングル』です。火山の噴火によって、発見された古代遺跡が引き金となり、ギリシャやローマの形而上的な文化への憧れから、普遍的な美を追求してゆくこととなり

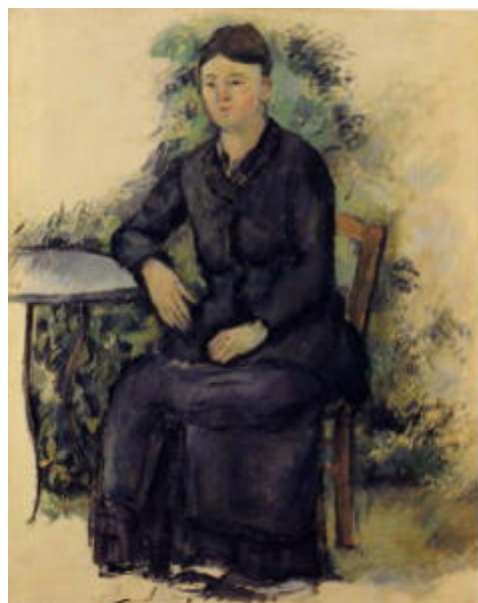


りました。また、この時代は、ナポレオンによる第一帝政期にあたります。彼らの描く作品は、その普遍美を象徴する古代ローマやギリシアの神話や歴史に材を取ったものや、革命派の英雄的な寓意画などで線描の正確さには、目を見張るものがあります。一方、その『新古典主義』から派生し、後には引き継いでゆくこととなるのが、『ロマン派』です。代表画家は、『ウジェーヌ・ドラクロワ』と、『テオドル・ジェリコー』でしょうか。彼らもまた、歴史画や現実の事件の記録画的なものを主題としたため、先の

『新古典主義』と混同されたり、同一視されたりすることも多いのですが、その明らかな違いは、躍動感や感情の発露です。静謐さをたたえた『新古典主義』とは一線を画し、『ロマン派』は、画家個人の様々な感情が、その絵の中に見え隠れします。また、同じ歴史画といっても、彼らはそれぞれの国の自我に目覚めた、歴史を下った中世の絵が中心となりました。また、前者がデッサン力を重視したのに対し、後者は、色彩そのものに着目し、これが印象派への萌芽ともなりますが、反面、印象派が起こってくると、前者の形式美を継承してゆくことになります。

<写実主義からバルビゾン派へ>

写実主義は、その名の表すとおり、現実を直視し、その美だけではなく、醜悪さもとらえてゆこうとされたものです。形式美の追求によるアカデミズム絵画が、またその主催するサロンそのものが、理想化、形骸化されてゆくことに反発し、日常や市井に目を向けています。代表画家としては、『ギュスターヴ・クールベ』や『オノレ・ドーミエ』などがあげられますが、現実社会の寓意や、政治批判など、常にその身近に材を求めました。また、『バルビゾン派』も、写実主義の流れに入ります。彼らは、文明化の進む都心から離れ、農村の日常生活と自然への賛美の念に人間本来の姿を求めました。その名のもととなった、パリ近郊のバルビゾン村やフォンテーヌブローの森を多く訪





れ、あるいは定住して、自然の風景や顔に汗して働く人々を描き続けたのです。真っ先に名前が挙がるのは「フランソワ・ミレー」でしょうが、最初の提唱者は「テオドール・ルソー」です。また、前回でも印象派への橋渡しとして名前を挙げた「カミーユ・コロー」もまた、バルビゾン派に属しています。このことからわかるように、先の『ロマン派』から続く流れの中で、印象派を生む決定的な素地となったのが、この『バルビゾン派』です。



<後期印象派とその後の流れ>

一方、マネから続く印象派に疑問を持ち、新たな絵画の世界を模索しはじめる人々がでてきます。印象派は、その光と影の振幅や、画面の明るさに腐心するあまり、画面の輪郭などが、おろそかになります。また、見たままの印象を重視したその絵は、あまりに抽象的になっていったのです。ここから、『後期印象派』が生まれ てきます。「ポール・セザンヌ」「ジョスジュ・スーラ」「ヴィンセント・ゴッホ」「ポール・ゴーギャン」の4人に代表される『後期印象派』ですが、今までとは違い、4人が4人とも、その違いが大きいのが特徴です。

セザンヌは、もっとも深く『印象派』と関わり、その第1回の展覧会から参加していますが、印象派の形態感覚の欠如を嫌い、複数の視点と幾何学への還元という2つの技法を用いて、その後のキュビズムをはじめ20世紀美術への決定的な方向性を与えたといわれています。

スーラもまた、印象派を出発点としていますが、そこに古典的な秩序を与えようとした。独自に光学と色彩の研究を重ね、点描による手法を生み、また線と感情の法則性を追求しました。その作風は静謐で、詩情に溢れています。彼の流れから、新印象派が生まれ、そこから先述のキュビズムやフォービズム、さらには未来派へと、移ってゆきます。



ゴッホは、日本でもファンの多い画家の一人です。初期の時代においては印象派の影響を感じさせる明るく華やかな色彩の作品を多く残していますが、次第に色彩は強烈さを増してゆき、不安定な精神を内面化させ、感情や観念が強く感じられる表現主義的な画風を確立してゆきます。ここから、フォービズムやドイツ表現主義が発展してゆきます。

最後に、ゴーギャンですが、彼はゴッホとの親交でも知られ、アルルでは、一時期同居生活を送りますが、それは悲劇的な訣別を持って破たんし、ゴーギャンは、未開の地、タヒチに新天地を求めます。そこで、彼の提唱する総合主義は結実し、裸婦像をはじめとする絵に、豊穡な色彩の世界を展開します。彼は、ポン=タヴァン派と相互に影響し合い、ポン=タヴァン派からはナビ派が派生し、またドイツ表現主義へも影響を与えることとなります。



また、19世紀の後半の美術の重要な流れとして、『象徴主義』があります。内面的な思考や精神状態、また夢などを表現しようとした象徴主義は、多様な表現形態へと至り、国際的な潮流となりました。先駆的存在として、イギリスのラファエロ前派がよく挙げられますが、ベルギーやスイス、オーストリアなど全ヨーロッパに広がってゆくの です。フランスではモローやシャヴァンヌ、オランダのアンソール、オーストリアのクリムトやシーレ、スイスのホドラーなど、枚挙に暇がありませんが、退廃的な世紀末文化の代表でもあり、文学や音楽などの様々な芸術に影響を与えました。

この後、20世紀芸術へと入ると、主流を形成する単独に近い形のもの はなくなり、様々な表現形態が乱立してゆきます。

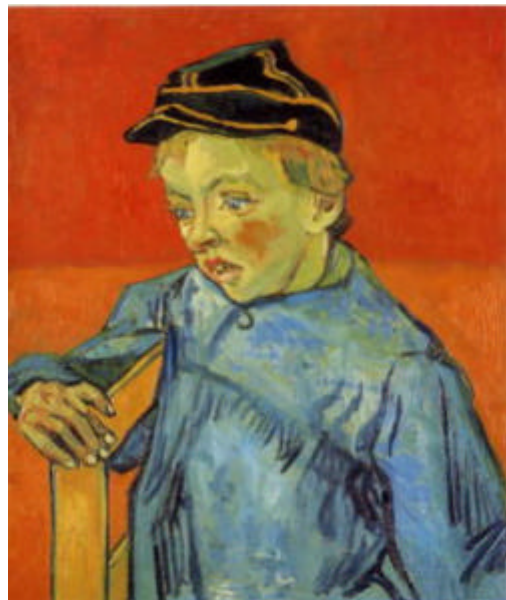
一応、以上で印象派の周辺の紹介は終了としたいと思います。紙面の都合上、随分と駆足の紹介となりました。何ごとでもそうで



すが、一つのものが成立もしくは登場するとき、前にはそれに影響を与えたものがあり、後にはそれに影響されたものが続いてゆきます。また、主流には傍流が、表には裏が必ず存在しているのです。それこそが、歴史の流れそのものだと云えるので

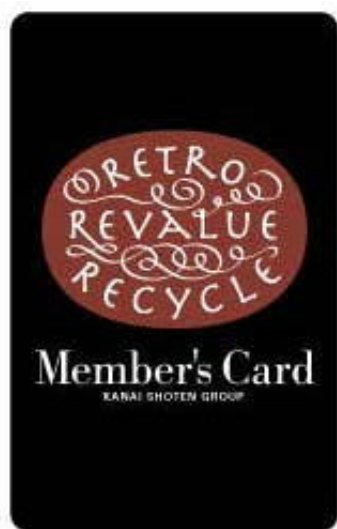
はないでしょうか。しかし、時代は流れ、歴史は続くとも、変わらない何かは必ずあります。前回から続くこの度の紹介で、少しでもそういった美術における歴史の流れを感じ、変わらない何かを感じ取り、興味を持って頂けたら、これに優る喜びはありません。

(文責 :川上亜衣子)



4月より 新しい メンバーズカード誕生！

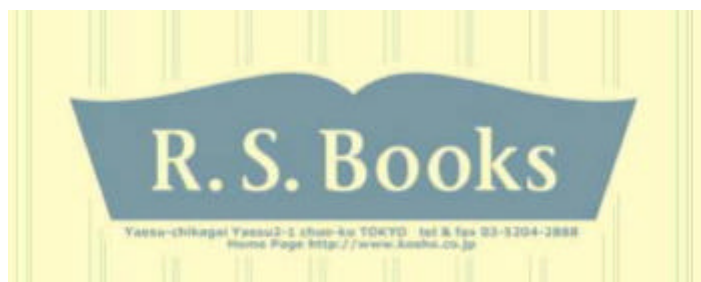
金井書店グループメンバーズカード



売っても 買っても 特典付
店舗毎に特典が工夫されています
特典内容は各店でご確認ください

従来の、ポイントカードはメンバーズカードに移行させていただきますので、ご了承ください

4 / 2(月)グランドオープン



古本屋が新しい“型”で登場します。

あらゆるお客様に訪れていただきたいので、バリアフリーを念頭に利用しやすい空間を確保しました。
愉しく、ゆったりとした時間が過ごせるふるほんや。本、ポストカード、版画、陶器、お花・・・etc.